

東大見学会・企業大学訪問の二日間は、とても充実したものとなった。一日目の笹川平和財団・日本財団・ディレクトフォース共催の夏季プログラムに始まり、企業大学訪問、OBOG による座談会、東京大学オープンキャンパスと、四つの大きな行事があり、得るものが多かった。

一日目の午前に行われた夏季プログラムでは、国際社会で活躍する方々から直にお話を伺うことができた。留学についてのお話や、研究者としてのお話を主にして頂いた。私が将来学びたいと思っている学問は、日本だけで学ぼうとすると少々無理がある。だからこそ、実際に留学された方のお話を直接伺えるというのは非常によい機会だった。留学において大切なことには、日常生活においても大切なことにも通じているように感じた。今回伺ったこと一つ一つを意識し、日々を過ごそうと思った。また、私は将来研究者になりたいと思っている。しかし、研究者の方から直接お話を伺う機会は今までなく、今回が初めてだった。研究者の心構えや仕事の楽しさを直に伺い、私は改めて研究者になりたいと思った。

一日目の午後に行われた企業大学訪問では、私は国立天文台を訪問した。世界でも最先端の研究をしている施設で働いていらっしゃる方からお話を伺った。まだ誰も見つけていないことを見つけるのが研究者だ。宇宙空間で活動することは難しい。加えて天文学の歴史は何百億というものだ。そのようなものを調べるのにはとんでもない苦勞が付きものだろう。しかし、今回お会いした方々は、皆様生き生きとした表情をしていらっしゃった。説明をしてくださる際も、とても楽しそうだった。本当に天文学が好きで、それを研究し続けることが楽しくてしょうがない、というように感じた。私は、好きなことをずっとやっていきたい、新事実を発見したい、と思うか

ら、研究者になりたいと思っている。それは、きっと楽しいと思うから。実際に研究をされている方を見て、研究されていることを話していただいて、自分の好きな学問を研究するということは、どれほど楽しいことかを強く感じた。苦勞などは、ほんの1時間程度見学しただけではしっかり理解することはできない。今までに大きな失敗をしたかもしれない。やめたいと思ったことがあったかもしれない。それでも笑顔で働くことができるほど、魅力的な職業なのだと思う。

一日目の夕食後、OBOG による座談会が行われた。東大を選ぶことの利点、それぞれの学部における魅力などについて話していただいた。ほかには、高校時代の勉強方法や選択科目についても丁寧に教えてくださった。私は文系なのだが、なぜ文系が良いのかと訊かれるとはっきり答えられないことがある。文系の方が好きだからとしかいうことができなくて、魅力を自分の言葉で伝えることがうまくできないでいる。今回の座談会で、「文系のいいところは、共通の真理が無いところ、解説書が無いところ」とおっしゃった方がいた。まさしくその通りだと思った。正しいと思われていたことが、新発見によって覆される。正しいと思われる思想が時代とともに変化

し、正しかったはずの思想は間違っているといわれる。どんな時代においても確実にいえることというのは、案外見つからないものなのだ。その方は、なぜ自分がその学部を選んだのか、明確な答えを持つようにともおっしゃった。その学問の最大の魅力を、自分なりの言葉で、伝えることができるよう、自分の希望する学部についての理解を深めようと思った。今回お話しになった方々のほとんどは東大生で、東大生の勉強についての本はたくさん出回っている。そういった本を読んだときは、合格者のした努力はよい大学に入り学歴を得るための努力のように思えた。しかし、本を読んだときと、実際に会って直接お話を伺うのとでは感じ方が大きく違った。自分

の学びたいことを好きなくらい学ぶための努力なのだと思う。学びたいことを好きなくらい学ぶには、それ

なりの環境が必要だ。その環境を手に入れるための努力だったのだ。東大など、頭が良いといわれる大学に在籍されている方々は、ただ良い大学に入りたいからその大学を選んだのではなく、少しでも良い環境で自分の学びたいことを学ぶための努力をした方々なのだと思います。

そう考えを改め、二日目の東京大学オープンキャンパスに臨んだ。私は、文学部の模擬講義ふたつに事前申し込みをしていた。講義の前には、文学部の特徴についてのお話があった。文学部とは、人間の行動を考える学部だそうだ。私は、中学三年、真剣に進路について考え出す時期になるまで、文学部という学部を全くもって分かっていなかった。文学部には大きく四つに分けると、言語、歴史、思想、行動の分野があるそうだ。しかし私は、文学部は、いうなればいわゆる『国語』で習う分野の学問だけをやっているのだと思っていたのだ。当然それだけではない。もちろん今はそのことをきちんと理解している。しかしながら、中学三年まで、そんな事を思っ

ていたし、もっと詳しく文学部について知らねばならないと前日の OBOG 座談会でも思ったため、模擬講義には気を強く引き締めて臨んだ。

一つ目の講義は「近代の戦争を史料から考える」というものだった。これは、歴史の分野に入る。私は歴史が好きであるから、以前よりこの模擬講義を楽しみにしていた。歴史は過去のことを学ぶ学問だ。過去を知って何になる、知ったところで社会にどう役立つのか、と言われたことがある。そのとき私は、相手を納得させるような答えを返すことができなかった。ある人は、天才の歴史書とは『過去を描きながらも、未来を創り出す手助けをする』といったらしい。うまく説明はできないが、私もその通りだと思った。過去から学べることはたくさんあるはずだ。学んだことをこれから先の未来へ生かすこともできるだろう。そのための手助けをするような歴史書

こそが、天才の歴史書なのだ。国同士の諍いには、歴史が関わっていることが多い。過去の戦争、植民地、原因はいくつかあるだろう。そういった歴史を調べることで、なぜお互いが争っているのかを理解することができるだろう。諍いを鎮める手立てだって考えられるだろう。テロや紛争を鎮める手立てだって、あるいは見つけることができるかもしれない。歴史を学ぶことで社会に貢献することはできるのだ。私はこの講義を受けて改めてそう思った。

二つ目の講義は「日本文学から分かる視覚の仕組み」というものだった。心理学の講義だった。心理学は理系と文系の間にあるような学問で、文系の学部である文学部に属してはいるが、それなりの理系の知識も必要とされているらしい。今回の講義は題の通り視覚に関するものだった。文学作品には様々な視覚の描写がある。そういった描写について考える講義だった。教授は『見る』とは、「木を見て森を見ず」「森を見て木を見ず」ということだとおっしゃった。要するに『思い込み』であるらしい。太宰治の作品である『女の決闘』を、教授は例の一つに挙げられた。この作品の中に女が目の前の女学生以外何も見えなくなるという描写があるらしい。小説な

どでは、ある一つのもの以外見えなくなるというような表現はよく使われているように思う。そういった表現を実際の現象としてとらえたことは、私は今まで一度もない。だからこのようなとらえ方は新鮮で、非常に興味深かった。心理学にも少し興味を持った。

今回の東大見学会・企業大学訪問では、自分がなりたいと思っている職業についても、入りたいと思っている学部についても、理解を深めることができた。以前よりも具体的に将来について考えられているように思う。この経験を生かし、これからの学校生活、進路選択につなげていきたい。